

田中雅一編

『フェティシズム論の系譜と展望』（フェティシズム研究一）

京都大学学術出版会 二〇〇九年二月二十八日刊 A5判

xii 十三七七頁

四、二〇〇円十税

本書は、京都大学人文科学研究所の共同研究班「フェティシズム研究の射程」二〇〇〇年度～二〇〇三年度、および「フェティシズムの文化・社会的文脈」（二〇〇四年度）の研究報告書である。報告書は三巻構成で、「系譜と展望」を扱う本書に続く第二巻は『越境するモノ』、第三巻は『侵犯する身体』と題して二〇一一年までに全三巻が出版されるはずだった。五年間の間に六四回もの研究会が行われ、延べ六八人が報告し、報告書に執筆者にふくまれていない報告者も二四名にのぼる、という近年にない矚目すべき規模の研究会であった。

以下順を追って内容を紹介する。

「序章」で田中雅一は、本書の内容をかなり網羅的に論じてくれている。本書全体のとりまとめの役割を果たすものだろう。

フェティシズムという概念を切り口にして身体性を含めた人とモノとの関係に総合的かつ学際的に切り込み、近代主義的パラダイムの批判へつなげる試みだ、と本書の位置づけが宣言される。近代的なパラダイムは、人がモノを操作したり解読する、という一方的な主客関係でとらえさせる。フェティシズムはこうした一方的関係を攪乱する可能性を秘めている。真実の誤認、代用品。そこが批判の対象にもなってきたのだが、それを転倒させて、方法的に、フェティシズムによる批判を試みたいのだという。ただし、宗教、性、商品、あらゆる分野における「現代のフェティシズム化」という現状については認識しつつもアンチ・フェティシズムの立場に立つ、という。フェティシズムは、何かの不在であることを示すとともに不在であることを覆い隠し、哀悼する。母のペニスの不在に即して性的フェティシズムが生み出されるように、交換価値の不在を覆い隠すように商品のフェティシズムが誕生し、神は存在しないという事実の否認のために宗教的フェティシズムが生み出された、という主張は、本書のなかでも最もラディカルな立場表明のひとつである。ただそこには事実と否認は両極的であり、簡単には否認できない、と注意深く付け加えている。

フェティシズムの取り違えのメカニズムと見なす立場からは、啓蒙的な非対称的な関係が再生産されるばかりだ。近代主義的世界観では劣位に置かれていたフェティシストの視点から思考して生きる、身体とモノが相互交渉的に結びついているフェティシズム・ネットワークを構想することを田中は提案する。田中が希求するのは、ジェンダーやセクシュアリティの固定的な図式の危うさを認識して、開放的なアイデンティティ形成や多様な解釈を可能にする、創造的なよりよい生き方への道筋である。身体やモノとの関係で批判力や交渉力、欲望、差異を認め、不気味さやトラウマ、肉体の物質性からの完全な離脱を幻想とする、横断的な生成に関わる開放系のネットワークであるという（「序章」）。

第一部では、宗教と精神分析の領域でのフェティシズム概念を取り扱う（二二六頁）。

村上論文が扱うのは宗教的フェティシズムの系譜である。一二世紀終わりのポルトガルでは、「呪術・魔術」を意味した。一七世紀以降、アフリカ原住民の宗教とその崇拜対象物を指してもちられ、一八世紀に描かれたのは、神とモノとを混同する欲求と情念により突き動かされる未開人の姿であった。

宗教改革を契機として、フェティシズム的要素は、徹底した偶像崇拜批判を経由して、教会からは駆逐されたが、近代西洋の言説空間のなかでは、否定性を帯びながらも生きながらえた。「精神性」を「文明」とむすびつけ、「物質性」を「未開」と連想する近代的な理論的枠組みのなかで、宗教を支えるうえで不可欠な影の存在であった、と村上は説く（第一章）。

続く佐藤論文は、偶像崇拜の禁止から説き起こされる。宗教的経験に対する沈黙を超えて、否定

を重ねた結果、能力も存在も引き剥がされた人間は神を称え、上昇していく。このあふれだす「過剰」が宗教経験の核となる。絵画にもこの試みは認められる。「描けないものを描く」抹消は、むしろ物質性の強調であった。佐藤は、「非類似の類似」に、私たちの眼差しを偶像的思考／志向を捨て去らせる可能性をみる。「それ自体として」描くことができないう経験の存在。「神」へとつながる裏口が「モノ」にはある。モノの「他性」を抽出することによって「モノが人間を否定」し、人間との関係を切断することで現出する可能性がフェティシズムにはひそんでいることが示唆される（第二章）。

新宮論文は精神分析の立場から性的フェティシズムの概念の意味を探る。フロイトがフェティシシュは「女（母）のファルスの代用品」であると考えたとき、その幻覚は錯覚にまでやわらげられなければならない。先祖からの生命の継承を象徴して社会構造と個人を結びつけるフェティシシュ、沖繩のトートローメーや「遺体」が、人間が「神」や「仏」になるための回路としてフェティシシュでありうることを例示する。人間の個別の生は社会構造から生み出され、はじめの移行として「移行対象」があり、その終わりには「遺体」や「位牌」がある。フロイトが発見したのは、「女（母）のファルスの幻覚」が存在する、という事実、そしてもうひとつは人間の存在および不在の弁証法の原点にフェティシシュが存在する、ということである（第三章）。

齋藤論文は日本語のなかでの「フェティシズム」の系譜を辿る。「フェティシズム」は、ビネによって一八八七年に発見され、クラフト＝エビングの『性的精神病質』第四版にカテゴリーとして導入された。一九二〇年までに『性的精神病質』を日本語文化圏が受容する過程は、三つのフェーズに分けることができる。第一フェーズには、在欧米の知識人や、森鷗外など著作に接した人間の果たした役割が大きかった。この時期、この概念は「不在」であった。続く第二フェーズには『性的精神病質』第四版の抄訳により、「フェチシステン」としての紹介がなされた。当初は曖昧模糊とした概念が、さまざまなルートを通して一九〇四年ごろまでに導入され一九二二年には定式化がなされた。つづく第三フェーズにいたると、「変態性欲」という記号がつくられ、「正常」な性行動としての生理的フェティシズムも指摘された。呉秀三は、患者が集めた女の髪の毛の写真を通じて、精神分析の日本での症例として実体化した。谷崎の作品は、性的倒錯を感じていた人間が自覚的になるプロセスを描き、日本の伝統にたどることができ「系譜」が存在することを指摘し、少数派であるというフェティシストのあり方を示した（第四章）。

第Ⅱ部では、モノ研究との関係でフェティシズムを取り上げる（二六頁）。

モノとは、ひとつの連続体である世界を、言語によって分節化された結果に過ぎない、という認識に大西は異議申し立てをおこなう。

慣習化された社会的実践が遂行されているのは、「暗黙知」の体得された結果である、「暗黙知」が体得されているから実践が遂行されている、というトートロジー。大西はルソン島山地民の土器製作者にその突破口を求める。彼らはその知識や技能について明瞭に言語化できないにもかかわらず、「名人芸」としかいえない実践を達成している。土器は、金属の工具で「適当な厚さ」に内面を削って制作される。計測の結果、その厚さの精度はミリメートル単位以下。これは使用者である現地の女性たちの「音色」にもとづく評価とも合致する。結果として、均質な土器は使用者の社会的要請に応え、視野をひろげれば燃料の量や土器の破損率、労働量や食・住環境にまで影響する。モノとヒトとの関係性は、言語を介さず絶え間なく社会に働きかけているのである。「言語中心主義」から脱してその非言語的な回路をとらえることが、モノとヒトとの関係を正しく捉えるのに必要であると大西は訴える（第五章）。

周りにあるさまざまな人やモノの関わり、その全体の力があるのではないか、と足立論文は問いかける。モノをアクタント（行為体）としてとらえ、そのエイジェンシー（行為能力）を関係的で、非意図的能力として考える。全体を視野に入れようとすると、特定要素が重要な役割を担ったり、要素の混合が媒介された行為を変化させることも多い。複雑な緊張関係を理解するためには要素の分解と比較が必要である。とりわけ、転用の限定性とアフオーダンスの存在に注目する。人とモノ

とを対称的にあつかい、その異種混交的アクターが相互に媒介しあいながら生成する流動的なネットワーク。これは安定し、意識せずに維持できるときには忘れ去られる、という特徴をもつから、その生成過程と事実とを相互に把握する努力が必要とされるのである。近代的な意味でのフェティッシュも、単に事物に投影された信仰や欲望ではなく、再帰的で集団的な実践の集積した、自立的実在、すなわち「フアクティッシュ」なのだという。いかなる実践にも、そこに巻き込まれ介入する、モノに惹かれる「焦点化」が起こる。焦点は強化されたり、他のアクターの介入や偶発性により弱まったり、他のものに移ったりもする。移ろいやすいパフォーマティヴィティを記述するための語彙の開発も求められている(第六章)。

価値の源泉が人間の能力に内在していることが自明視されていることを森田論文は問いなおす。森田が扱うタイの農業機械工は、行為者の意図よりも対象や道具といった物的環境にミクロな動作が依存し、身体と環境を調整して遂行されている格好の事例を提供してくれる。共同作業を行うにせよ、道具の性格にあわせるにせよ、人間とモノとの間には、動態的な調整(アレンジメント)が働いているのだ。実践の持続性は空間と人とモノの配置に支えられ、物品の移動と滞留を繰り返す空間のなかで行うは連鎖している。

同僚や顧客による評価によってこのアレンジメントは評価され、差異のマトリックスが生み出されるが、同じような道具を使い、同じような鋼材を加工していてもこの場合の評価基準は普遍的ではない。製鋼所からの距離と、顧客の経済力などにより介入する中古リサイクル業者とのネットワークの有無により日本とタイの旋盤工は集合的な差異化が認められる。仕入れ先の変化やタイの経営者が日系企業とのコネクションを通じて下請けに変化するなどネットワーク上の位置がかわる可能性を常に秘めている。個人に内在していると考えられていた能力は、実は人とモノの間に分散し、実践を成立させる多層的な空間のなかにある。タイの機械工業にみられる差異を、文化的要因による逸脱ではなく、ネットワークにおける構造的な位置としてとらえ直すことを可能にするのが実践のトポロジーだ。そのことは差異、類似、集合性についての概念も異なる配置のなかで考えることにもつながるはずである(第七章)。

「キッチュ」な「物件」を写真におさめ蒐集する営みに伊藤は注目する。写真を撮る、という行為は、対象の所有につながるのである。こうした風景の再構築は、一九二〇年代の考現学をそのルーツにもつ。考現学は作業過程でしかないフィールドワークを目的化し、日常性活空間を断片化し続けた。一九七〇年代の終わりには、「路上観察学会」が成立し、一九八〇年代になると、「キッチュ考現学」が定着した。「キッチュ考現学」は日常生活をまるごと把握したいという野望を民俗学と共有しながら、「考現学者」の生活自体を「考現学者」が表現するなかで、「考現学者」の文化とを意識的に横断する点で袂を分かつのである。体制側は、「風景」として「郷土」を概念化し、日常生活を隠蔽し、平板化された遠景として「美観」を成立させようとするが、「キッチュ考現学」はこれを相対化しようとする。観察を通して「所有」「蒐集」を目指す点でも、表現における〈近代〉を問おうとする点でも、フェティッシュムと相通じるものがある。(第八章)。

最後に、第三部では、これまでの理論的な研究を踏まえて、どのような展望が示されるのかを明らかにしようとする(二六頁)。

数多くの犠牲者を出した大量殺戮は、平和を強く希求する意思と感情を自然と生み出す。この自然な感情が社会の回路のなかで、象徴としてのモノの呪物化がなされ、「ドグマとしての平和」に転化される。数多くの朝鮮人が原爆の犠牲になったことは、ヒロシマ・ナガサキという記号化と「唯一の被爆国民」という認識の影に隠蔽されている。なによりも日本人被爆者と異なるのは戦後の被爆者対策であった。苦難と差別の経験は、「碑」と「手帳」にモノ化されている。当初差別と排除の意味をもたなかった韓国人原爆犠牲者慰霊碑は、あるとき平和公園内になくことが問題視され、朝鮮人被爆者の苦難のシンボルと化していった。また「手帳」は、当初は交付を拒否され、支給されても「被爆者」を認定する意味をもつものだったが、母国に帰ったら原爆特別措置法の対象外とする四〇二号通達により、帰国した朝鮮人にとっては日本の被爆者との差別を体现するモノとして



呪物化されていった。このふたつの呪物は、方や平和公園内に移設され、「手帳」も一連の「援護法裁判」によって勝ち続けることによって、援護を受けることのできる証へと変質した。モノとしての扱いが変わることにより、歴史認識や排除構造、そして苦難の生を隠蔽してしまう役割を不可避的に持つてしまう。国家の弁護・免責で一貫していた朝鮮人に対する大日本帝国の人権侵害だが、二〇〇五年広島高裁、二〇〇七年には最高裁で通達の違法性を確定するなど、ある程度の勝利をおさめてきているものの、依然として苦難の生を強いている。「碑」の移設「手帳」交付という「モノ的解決」によって生成される意味の連鎖は実は現実を隠蔽するものでもある。

在韓被爆者たちは、身体から切断された物理的なモノに呪力を刻むのではなく、身体から乖離せず、身体と苦難の生をつなぐモノとして、語りの「声」をつくりだしていった。集合的な経験を物語り、「標準化」「範型化」して呪文とし、自分たちを苦しめる構造と対峙しようとする。この自らを疎外しない容易なモノ的操作を拒否するフェティシズムにこそ、批判を超えうる地平が切り開かれると松田は説く(第九章)。

春日論文はフェティシズムをタウシングの描き方を手掛かりにして主題化するものである。コロンビアのカウカ谷南部のサトウキビ農園でのことである。ある種の人びとは小麦粉でつくった彫像に呪文をかけ、悪魔と契約を結ぶ。契約の結果、仲間よりも多くのもうけを得るが、生きながらにして贅沢品に振り回され、若くして苦しみながら死んでいく運命が待っている。ボリビアのスズ鉱山では、テイオという聖霊の像が祀られて、供犠の対象となつていく。テイオに好意を得られないと、採掘高はもちろん命さえ危ないという。カーニバルに行われるふたつの野外劇では、テイオは鉱山の収益に目のくらんだ征服者の役割を果たし、過去の神話的解釈に照らし合わせ、現在の生活の異常性とそれが長続きしないことが暗示される。テイオは、悪魔のようなフェティシユとして、かつては無縁だった現在の生産様式に対する絶望を具象化するのである。これらの悪魔的商品社会のフェティシズムに対するタウシングの分析は、主体や差異、そして支配をめぐる主題を描き出したものであるとの評価をされる一方で、批判にも晒される。多くは「全資本主義」と「資本主義」との差異が本質的であるか疑うものだ。また恵みや善を体現した補完的な神格の存在が指摘されるもする。

フェティシズムは、主体が表象を欲望するときにステレオタイプからの挑戦を受け、差異を拒絶しつつ主体の欲望を満たすものとして規定される。しかしそれも二項対立への執着に由来するものである。カウカ谷鉱山で特別の稼ぎをあげた農民は、いわば二項対立のステレオタイプにはおさまらない存在であることには違いない。悪魔としてフェティシユ化され、「契約」という征服者の文化を模倣することによって秩序の混乱に対する再構築の過程と緊張を不十分ながら盛り込んでいくともいえる。絶対悪であるとともに祖先を死に追いやった西洋人男性への祈願、という二項対立には収まりきれない不安やおびえが表現されている。

こうした異種混淆、主客転倒が繰り返されるフェティシズムの顕現する世界を描写する際、『シャーマニズム、植民地主義、そして野人』でタウシングはマジカルリアリズムの手法をもちいた。この手法は、非同一般的なもの、背反するものを包摂し現前させる手法として、生起する不確定な状況を不確定なままに矛盾と齟齬を生成と緊張を私たちの前に提示する点で格好の表現方法であった。タウシングがこの著作でマジカルリアリズムという装置によって達成したのは、主客転倒を倒錯ではなく正常とみなしながらも、徹底した誇張による狂気じみた全体性としてのフェティシズムであり、消滅の対象から弁証法的な対立へと誘い、反混淆性を本来的にもつフェティシズムを異種混淆的に位置づけることによって緊張や脅えを効果的に現前させることであった(第一〇章)。

性的フェティシズムをビネは精神異常としてではなく、正常な愛情の延長線でもとらえようとした。マンヒズムとともにフェティシズムはその性的な欲望の満足を遅延させる。ザツハーIIマンツホの『毛皮を着たヴィーナス』が描くのは、主人公が望み実現した、官能性からの毛皮による隔離と、毛皮によるヒロインの獣性と超人間性に支えられた苦痛と快楽を伴う奴隷契約だった。危うい均衡のなかでその誕生が予告された「新しい人間」は、フロイトが構想したような「究極の性目標に向

かつて「正しい」性の背後にある権力作用を見抜き、正しい社会の権力作用の根幹である家族制度からの脱出であった。最後は主人公が聖母に心臓に釘を打ち込まれながら快楽を感じるといふ壮烈な『聖母』に描かれる作品世界は、未知の快楽と危険をともにはらんだ、両義的な新しい地平を開く。

宗教的なるものに潜在する物質的基盤は、マプーチェ文化のなかにも見ることが出来る。霊を体現するヘビを飼い、霊と契約を結んで金持ちになるが、何らかの理由で破綻してうまくいかなくなり、最後は身を滅ぼす、という話がある。この種の下級霊への祭祀は常に第三者からは「よからぬ力」への嫌疑を招きかねないものであるが、一方からみれば至高神崇拜でも、他方からみれば邪霊との取引にも見える。軍事的な力にしろ、経済的な成功にしろ、個々の生を支える「力」のよりどころとして、本人に最終的に危害を加える可能性を含めてフェティッシュなものとの関係をマプーチェの宗教的な思考様式は想定している。ビネが愛情の背後に物質的基盤をフェティッシュの萌芽として認めるようにマプーチェの信仰体系も天上の至高神への崇拜だけではなりたない。肉体をともなうて生きていかねばならない人間に必要な生活のための足がかりとして、下級霊への祈願や生け贄が存在するのである。個々の人間は、自分の周囲から具体的なフェティッシュをみつけたし、テリトリーを形成していると考えることが出来る。

存在論的フェティッシュム、存在論的テリトリーの映画とも形容すべきブニエルの映画作品では、突如「事物との濃密で幻想的な関係」のなかに登場人物が放り込まれ、社会的地位も、役割も剥ぎとられ、具体的、物質的な存在として行動することを余儀なくされる。このモチーフは代表作『皆殺しの天使』にも、スペイン西部のラス・ウルデス地方の苛烈な、それだからこそ力強いといえる生活を集中的に撮った『糧なき土地』に、あますところなく描かれている。彼らはこの不毛で、敵対的な土地を、決して離れようとしなない。そして、われわれも、と筋内は示唆する。この映像が寓話的に描き出すフェティッシュムの問題、テリトリー形成の問題、そして事物との幻想的な問題は、現状から逃げようとはしない、あるいは逃げられはしないわれわれにも突きつけられていると(第一章)。

現代後期資本主義社会では人びとはウェブ上の仮想空間で身体をもって集うことなしにモノや画像に魅了され続けている。ジェンダー化、セクシュアリティ化された社会秩序のなかで、西洋近代的な親密圏と公共圏という対概念は、再生産と生産、女性と男性、自然と文化、肉体と精神などと共振して生秩序をかたちづくる。そこに埋め込まれた生―権力は、近代知と近代的生秩序を突破する可能性を秘めたフェティッシュムをも、その秩序のなかに取り込んでいこうとする。フェティッシュム現象を、近代という自己から離脱したものにとらえるためには、分節されていない領域に目を向ける必要がある。

青木はこの分節性の罫から逃れるために生の位相をふたつに分けて考えることを提唱する。第一の位相は、根源的で、意識・ロゴス・認識から逃れやすく「物自体」にかかわる領域である。これを根源的位相と名づける。記号や交換などを通じなくとも、無生物との間にも親密性をとりむすぶことのできる領域である。いわば「地」の部分であり、「図」の基盤となっている。いっぽうで、「図」の部分には、分節性/記号性/言語性を中心として主客の枠組みに依拠する領域であり、これを現象的位相とよぶ。人間は、現象的位相の共有を前提としなくとも出会おう。その出会いの相互関係は「共生」のコンヴィヴィアリティ(宴)である。

公共圏、公的領域においても、介護という世界は一般的な資本主義原理にはなじまず、大手企業といえども参入に失敗したりする。ここでは、標準化され品質管理された商品としての介護ではなく、個別具体的な「あの人」の介護が求められた。また、その現場には、「自己決定」や「自己責任」という近代的人間観はなじまない。「死にたい」という老人に「自己決定」だからお手伝いしましょう」というわけにはいかない。生の根源的位相にある老人介護に重要なのは、「ただ、ともにある」ことだ、ともいう。このような時間は、青木の暮らしたフローレス島の山岳地帯には多くの場面で見られた。近代性の呪縛からある程度自由な社会だったからである。

生の根源的な位相にあつては、親密性は公共性に対置されるなにかではなく、身体は精神に対置される何ものかではなく、人と人が主客の関係にないように、人とモノも主客の関係にはない。近代的なシステムの浸透により、生活世界から失われてゆく側面を「存在の忘却による故郷喪失」とハイデッガーは名づけている。メルローポンティは、主客の相互浸透、間身体的関係、世界と身体との融合は、すでに実現されてしまっているものとして、人とモノとの関係を主体である人が対象としてのモノに関係をもつのではなくモノが人を誘惑するような存在論を展開した。人とモノとの根源的位相における関係は、世界内存在として本質的であり本来的なものなのである。回復すべきなのは覚醒した人間像ではなくて、根源的位相における「存在」だったと青木は結論づける（第二章）。

さて、本書の内容を追っていくと、「序章」で宣言されているとおり、繰り返しあらわれるいくつかのモチーフに気づかされる。ひとつは、近代の乗り越え（三頁）、それもフェティシズムを錯誤ととらえ、人間を主体とし、モノを客体とする硬直化した関係、そしてもうひとつはそれを一方的に記述しようとする言語中心主義である（とくに大西と青木は人類学の学説史に絡めて論じている）。これらの批判は、さまざまな角度から説得的になされていると思われる。

しかしながら、その乗り越えの方法は提示されないか、提示されてはいても否定形で語られ、漠然としており、いまひとつ明確な像を結ばない（のちに触れる青木は例外的である）。たとえば、「探究者」（一九頁）や「深み」（二五頁）には否定的評価が与えられているが、本書自体が執拗なまでの探究の書であり、十分に近代的な思惟に支えられた「深み」の追求ではないのか。また「ニヒリズム」にもたびたび否定的評価が与えられているが、「ニヒリズム」は議論の余地なく「悪」とする（近代的？）態度は、本書全体の論調からみると、違和感を覚える。ある種のニヒリズムすれすれのところを危なっかしく渡り歩くことも、また近代の乗り越えとして想定される一つの道なのかもしれないし、本書全体の論調は「超人」への変貌を唱えるニーチェのそれに少し似ていないだろうか。

編者は「はじめに」において、本書の目的を「フェティシズムあるいはフェティッシュ概念の歴史的展開をたどること」（iv）とし、「宗教人類学、精神分析、物質文化論などから、理論的あるいは思想的なフェティシズムの歴史や今後の展望について考察する」（iv）と明言している。表題のとおりである。

それを手掛かりにして考えるならば狭義の宗教人類学からの発言は、田中の「序論」での議論と、春日や箭内のとりあげる事例にその気配がみられるだけで、あまり目立っていない。もちろん、随所で果たされた、通常は性的ないし商品フェティシズムを指して用いられるフェティシズムが、もともと宗教的なものに淵源をもつ、という一般には忘れ去られていたであろう事実を実証的にかつ説得的に浮かび上がらせたことは、高く評価されるべきであろう。また精神分析からの考察には、新宮論文が当たるが、ディシプリンからのそれというよりは、おそらくはそれを越えようとする個別な議論として読まれるべきであろう。また、本書が近代によって三領域に切り分けられてしまったフェティシズムの統合を目指すとするならば、切り分けられてしまった動因がより総合的に論じられる可能性もあつたように思われる。そしてそれが現在の「フェティッシュ化」傾向によって相互連が強化された理由も、である。とりわけ第一部には、いくつかの手掛かりがあるが、残念なことには総合的には論じられていない。「全体をまとめるような議論を目指してはいない」（五頁）ということだから、これは致し方ないことなのである。

むしろ目立っているのは、複数の論考で示される、ANIへの共感と、そのエージェンシー概念のモノへの拡張だろう。しかし、その拡張された結果は、あいまいさや移ろいややすさを自覚しつつ提示されたもので、みずみずしい可能性を感じさせるものの、拙速な判断や投資を躊躇させるものばかりである。これが読者に本書の随所で強調される「不安」をもたらすことをも意図されているとすれば、その点では大きな成功をおさめているといえよう。

第一部の概念の形成史と並んで、評者は個人的には物質文化論に含まれるような具体的な大西や



や森田のアレンジメントの議論には素直な関心をもった。対象も限定されているのでそれぞれの議論は明快で読みやすい。また、第Ⅲ部で青木の提唱する根源的位相という考え方には、本書で提示された近代の乗り越えのための方策のなかでは共感を覚え、可能性を垣間見たようにも感じた。とりわけ介護をめぐる議論は、これも具体的なだけに目を開かれる思いがした。しかし、相互浸透をいくら訴えても、これも二分法ではある。フィールドワークで実感としては経験しているはずの根源的位相という「地」は、西洋の思想家の用語によって「図」として描かれるのが果たして妥当なのかという疑問も残る。本書随所にちりばめられている通り、近代主義のトラップは随所にある。このあたりの困難をどう乗り切って存在論を救出するのは、残念なことには明確なビジョンを示してはくれない（それを求めるのはロゴス的で、記号的で、理性的なのかもしれないが。「ただ、ともにある」こと、このことの重要性和、人類学が理論的あるいは方法論的というよりむしろドグマとしてフィールドワークを重視してきた背景には何か通底するものもあるような気がするがいまのところ考えはまとまらない。

また、同じことだが、「序論」で田中のいう「展望」については、近代への批判で足並みがそろっている部分と対比すると、あまり明確な像を結んではいないようだ。

とりわけ欲望とともに肯定的に扱われる「ねばり」「ざらつき」「不気味さ」（二五頁）などがいったい何を指し、論者たちの目指す近代主義からの脱却がいかにして果たされ、どのような未来予想図として描かれているのか、評者にはよくわからない。これらは、おそらく「民族誌的」に現地語を解析するようなかたちで提示されたら、根源的位相の産物として垣間見ることができたかもしれない、との感想をもつ。田中が「序論」で提唱するネットワークにおいては、一方で近代主義的啓蒙的理性を批判し、他方でフェティシズムにも批判的な眼差しを注がなければならないという。空虚なゲームに踊らされ、メディアが喚起する欲望によって主体化させられてしまうのではなく、真実は隠されているとして深みを追うものでもないのだとも。しかし、それはいかにして可能なのか。踊らされている本人は踊らされていることに気づかないのではないか。

本書の執筆者は、「フェティシズムやフェティッシュについて厳密な定義を共有しているわけではない」（五頁）。多様な副次的テーマ、事実、概念、理論あるいは人物が大小入り乱れて百花繚乱する本書から、学ぶことは非常に多かったが、浅学の評者に十分に咀嚼できたとは思えない。また評者は近代主義に十分に毒されているようであり、そうした意味ではこの書評にはおそらくは不適であった。本稿で提示されたささやかな疑問点には、おそらく続く二巻が充分に答えてくれることであらう。